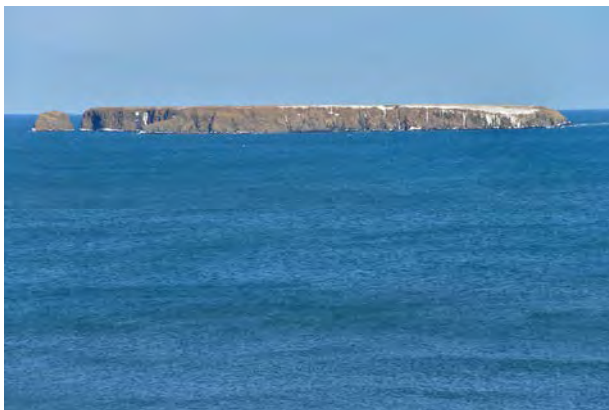


ユルリ島の馬



ユルリ島とモユルリ島



ユルリ島

根室市昆布盛沖に、ユルリ島とモユルリ島の2つの無人島があります。

ユルリ島には、本国では道東にしか生息しないエトピリカやチシマウガラス、ケイマフリ等北方系海鳥の繁殖する貴重な島として、1963年北海道の天然記念物に指定、1976年北海道自然環境保全地域に指定、1982年には、隣のモユルリ島とともに国指定鳥獣保護区(集団繁殖地、総面積200ha、うち特別保護区31ha)に指定されています。また、ユルリ島が、環境省選定の「日本の重要湿地500」に選ばれています。北方を代表する自然草原として代表的な植物は殆ど網羅されているために植物学的にも大きな関心を持たれています。そのためメディアはじめ、人の立ち入りは禁止されています。



幌加内ビオトープ研究会代表、
日本ビオトープ協会個人会員
内海 千樫



エトピリカと巣穴 絶滅危惧IA 類(CR)

1950年昆布の干場を求めてユルリ島に移住、翌年コンブ漁の労力として馬が持ち込まれました。1971年同島におけるコンブ漁は廃止されて移住者はすべて使役馬を残して撤退しています。島の放牧馬は自然繁殖で最大時数十頭いた馬は、牡馬がいなくなり自然減少して3頭にまで数を減らし現在に至りました。モユルリ島に比べ、ユルリ島の鳥相が薄いのは、馬が歩き回ることにより、土に穴を掘って営巣する鳥達の営巣を阻害することが大きな原因と思われます。

コンブ漁民の撤退後、1973年に根室市教育委員会において「ユルリ島、モユルリ島総合調査」が行われ、植物は北海道教育大学の田中瑞穂教授、鳥類は帯広畜産大学の芳賀良一教授が担当し、スタッフの一員として私も加わっておりました。報告書の考察においても、両島における野鳥の保護は、立地条件等からさほど難しいものではない。海上からの出入りを規制する事によって、相当の効果が期待できる。そのためには、民間所有(落石漁業協同組合)である島を、道あるいは市が買い上げ、市の保護条例の設置をはかって、馬の放牧は中止するのが最善であると記されています。



ウミガラス(オロロンチョウ) 絶滅危惧IA 類

しかしながら、これらの内容はその後十分に反映されておらず、40 年の間にウミガラス、チシマウガラスと言った貴重な鳥を失い、エトピリカやケイマフリも危機的な状態にあります。今年馬が3 頭にまで減り、引き上げるチャンスと思われました。

風雪に耐えて生き抜く馬たちの姿は確かに感動的で絵になることから、写真家がこれを撮り、テレビでも取り上げられました。2017年「根室・落石地区と幻の島を考える会」が設立され、2018年に馬(北海道和種(どさんこ))が新たに3 頭導入されました。クラウドファンディングで資金を集めての馬の導入が、美談として報道されている事が残念です。

「キリストの肖像画の残念な修復」という事件があったことをご存知だと思います。修復したご婦人は良かれという確信の下にされたのでしょう。それと今回の問題はよく似ているように思います。

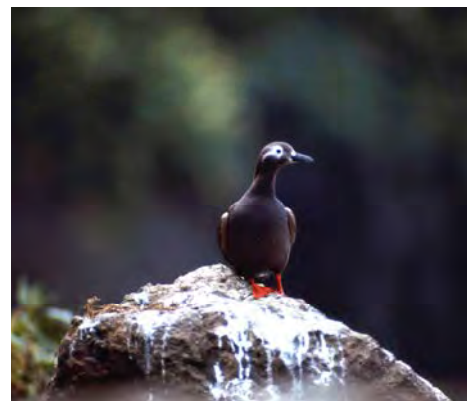
「考える会」を推進している方は、根室でも人望のある実力者と聞いております。残念ながら自然保護より観光あるいはイメージを重視する方と思われ、貴重な自然を守ろうとする人たちは異見を言えず肩身の狭い思いをしています。馬の放牧は厚岸あやめヶ原、濤沸湖畔で行っています。貴重な自然を守るために立ち入り禁止としている同島に、より環境負荷の大きい馬を導入すべきではありません。

《刺し網漁も禁止を・・・》

調査当時いたウミガラス(オロロンチョウ)やチシマウガラスは現在見られなくなりました。これは馬だけ



チシマウガラス 絶滅危惧IA 類(CR)



ケイマフリ 絶滅危惧II 類(VU)

でなく、刺し網の影響によるものです。潜水性の鳥達にとって、刺し網は致命的です。これまで漁業に付度して刺し網の問題は取り上げてきませんでしたが、今日、あらゆる魚種で、資源保護のために、漁獲量の規制がなされています。通過しようとする全ての生物を見境い無く捕獲してしまう可能性が高く、1991 年12 月20 日、第46回国際連合総会において公海上における大規模流し網操業の禁止が決議され、現在に至っています。この決議に対して、日本と韓国の二ヶ国が、それに反対しております。少なくとも鳥の繁殖地の周辺での刺し網漁は取りやめるべきではないでしょうか？

生物多様性の持続的な保全のために貴重な自然を守るという正しい行動が、今の経済や力関係で否定されることは残念の極みであります。皆さん方のお知恵とご理解ご協力をお願いいたします。

バングラデシュ・クルナ市の生物多様性保全と人材育成へ向けた取組み

1. 背景

バングラデシュのクルナ市は首都ダッカから南西方向に位置し、人口は150万人程、同国で3番目に大きい商業都市である。クルナ市の南方向にあるシュンドルボン(The Sundarbans)は、ユネスコの世界自然遺産とラムサール条約に登録されている世界最大級のマングローブや湿地帯を誇る。このシュンドルボンの森が、昔はクルナ市まで覆われていたと言われている。しかし、市内やその周辺部では工業団地の拡大や人口増加に伴う住宅地が広がり、森や湿地帯は少なくなっている。クルナ大学の専門家によると、インドハッカ(*Acridotheres tristis*)、カワセミ(*Alcedo atthis*)、スナドリネコ(*Prionailurus viverrinus*)は、生息環境の悪化により個体数が減少しているとのことである。動植物や人が共生できる都市環境をつくるためにも、市民がクルナ市の自然環境をあらためて見直し、彼らのイニシアティブにより都市の生物多様性保全の普及啓発を進めていく必要がある。特に、若い世代が自然環境保全に対して正しい知見を身につけ、彼らが態度の変容や行動に移すことで次世代へ継承されることから、若者を巻き込んで自然環境保全の取組みを進めることは極めて重要である。

以上の背景を踏まえ、筆者は、2018年4月から、現地の環境NGOであるバングラデシュ環境開発協会と共に、経団連自然保護基金の資金源により、クルナ市の生物多様性保全とその人材育成を進めてきた。特に、筆者は、事業全体の計画づくりや教材開発等を担当している。今回は、2018年4月～2019年3月までの1年間の取組みの内容やその成果、そして今後の活動内容と方向性を中心に報告する。



江戸川大学 社会学部
現代社会学科 専任講師、
公益社団法人日本環境教育
フォーラム 客員上席研究員、
日本ビオトープ協会 主席BA
佐藤 秀樹

2. 活動内容と成果

当該活動期間においては、主として、「(1)市民を対象とした自然環境保全の基礎調査」、「(2)クルナ市で生物多様性保全を進めるためのネットワークづくり」、「(3)クルナ市の自然環境をテーマとした教材開発と学校での試行」、「(4)ユースクラブを中心とした生物多様性保全の能力開発」の4つのコンポーネントで進めた。主な活動は下記の通りである。

(1) 市民を対象とした自然環境保全の基礎調査

クルナ市31区(ward)で暮らす市民620人に対し、同市の自然環境保全に対する課題等についてインタビュー調査を行った。その結果、市民からは、「市役所の生物多様性保全に対する政策がない」、「企業の汚水処理等に対する環境対策が不十分」、「市民がクルナ市の生物多様性保全を正しく学ぶことのできる学習教材が不足していることや、その普及啓発活動が十分に行われていない」等の意見が多くだされた。行政、企業、市民等の様々なステイクホルダーが連携・協働して、クルナ市の自然環境保全に取組む必要性を確認できた。



事業の実施場所(マル印箇所)



クルナ市を流れるパイロブ(Bhairab)川



ユースクラブの結成

(2) クルナ市で生物多様性保全を進めるためのネットワークづくり

クルナ市民が協力して生物多様性保全を進めるため、同市の各31区において20名/区のユースクラブ(Youth Club)メンバーを組織化した。また、クルナ管区の環境局・森林局、クルナ市役所、各区の市民代表者、クルナ大学の専門家や学生、小・中・高校の先生、ユースクラブの代表者等の様々なステイクホルダーにより、「クルナ市生物多様性保全ネットワーク(Khulna Biodiversity Conservation Network)」を結成した。そして、上記メンバーにより、定期的なミーティングやワークショップ等を開催して同市の生物多様性保全および人材育成を進めるための継続的な議論を行った。クルナ市生物多様性保全ネットワークの結成により、同市で生物多様性保全を進めるためのプラットフォームを整備することができた。

(3) クルナ市の自然環境をテーマとした教材開発と学校での試行

クルナ市の環境をテーマとした教材開発では、同市を代表する樹木、動物、鳥の3種類のポスター、人と自然が共生した都市づくりを考えるボート学習教材、同市を象徴するハゲワシを主人公とした読本の3種類を作成した。対象は、子ども、学生や一般市民等と幅広く使用できるようにし、クルナ市生物多様性保全ネットワークのメンバーの助言を取入れながら開発した。これらの教材を使用して小・中・高校や大学の計20校にて試行し、教師、学生からのフィードバックに基づいて教材の修正等を行った。クルナ市を対象とした生物多様性保全の教材を開発したことで、本格的な普及啓発へ向けての基盤をつくることができた。

(4) ユースクラブを中心とした生物多様性保全の能力開発

バングラデシュ環境開発協会が中心となり、ユースクラブのメンバーを対象としてクルナ市の自然環境の現

況や市民へ普及啓発するための手法について学習する研修会を開催した。また、ユースクラブ、クルナ市生物多様性保全ネットワークの協力の下、市内の道路沿いおよび公園において街の緑化を進めるため、インドセンダン(*Azadirachta indica*)、タマリンド(*Tamarindus indica*)、マホガニー(*Swietenia*)、マンゴー、ココナッツ等の植林(計10,000本)や木を植えることの意義および維持管理方法等について、ユースクラブが地域住民へ解説する環境教育等を行った。植林を進めることで都市の生物多様性保全へ貢献すると共に、ユースクラブの環境教育の技能習得や地域住民の自然環境保全に対する意識を向上させることができた。

3. 今後の活動内容と方向性

1年目は、クルナ市で生物多様性保全を進めるためのネットワークづくりや能力開発を中心に行った。2年目(2019年4月～2020年3月)の活動では、引き続き経団連自然保護基金の助成金を受けながら、1年目でネットワーク化した組織や開発した教材等を活かし、クルナ市民への普及啓発を本格的に加速化させていく。2年目の主な活動内容は、下記の通りである。

- ①31区の各ユースクラブによる自然環境保全のアクションプラン策定と区毎での実施
- ②植林(10,000本程)による都市の緑化や生物多様性の促進
- ③クルナ市民を対象とした生物多様性保全の歌の開発とその普及啓発
- ④小・中・高校(50校)等において開発した教材等を活用した生物多様性保全の普及啓発
- ⑤クルナ市の生物多様性の写真集やコリドーマップの開発
- ⑥クルナ市民を対象とした市内の生物多様性を学ぶスタディーツアーの開発

3年目以降では、クルナ市にある企業に対して自然環境保全への協力を求め、クルナ市全体で生物多様性保全活動を持続的に進めていくためのガイドライン作成や資金確保へつなげていきたいと考えている。そして、本取組みを通じ、工業化や人口増加の進む開発途上地域の都市において、住民が都市の自然環境保全を進めるための示唆を与えることができればと考えている。



開発した教材の試行



植林活動



鳥のポスター

協会活動状況:各地区

各地区委員会 活動状況

全国8地区の地区委員会では、その土地に応じた様々な活動を活発に行っております。
今号では今年度の活動状況・計画や報告等についてお知らせいたします。(2019年8月8日現在)

北海道・東北地区活動計画・報告 委員長 佐竹 一秀 (株式会社 エコリス)

1. 大槌町「農薬感受性ミズアオイ再生プロジェクト」支援

- ①開花場所の埋土種子攪乱作業(4月) ②発芽幼苗の湧水地域へ移植作業(5月)
- ③岩手県沿岸振興局担当者現地視察(7/16) ④大槌町へ現地ビオトープ化提案(8月
予定・生態園計画) ⑤大槌開催の「こどもエコクラブ交流会」での観察会(9/15)



大槌ミズアオイ、展葉

2. 「慈恩寺ホタルの里づくり」の支援

- ①マコモ植付けの面積拡大 ②ゲンジボタルの放虫 ③慈恩寺ハスの移植
- ④上流側の環境整備 ⑤導水路の整備

3. 金ヶ崎町のマツムシソウ保護活動支援

- ①現地調査 ②保護状況視察と意見交換
- ③環境交流フォーラムの支援



いわきホタル水路全景



いわき三和町ホタル水路、意見交換

4. いわき市三和町ホタル水路再生計画

- ①ホタル水路及び周辺の調査(4/11)
- ②関係団体との交流

5. 「植物界の「災害遺産」ミズアオイを知る連続ワークショップ」の受託(仙台市)

- ①ミズアオイの種子からの栽培 ②ミズアオイを調理して食べる(9/8)
- ③仙台湾沿岸の地層から埋土種子を探す(10/20) ④他団体と連携
- ⑤報告会及び報告書作成



仙台市ミズアオイ
ワークショップ、発芽

6. 活動を通しての会員拡大

関東地区活動計画・報告 委員長 砂押 一成 (株式会社 砂押園芸)

1. 自治会・学校ビオトーププロジェクト継続支援実施

- ・村松小ビオトープ ホタル放流会(東海村)
- ・長堀小4学年 ビオトープ学習会(ひたちなか市)
- ・常葉台ビオトープ ホタル観賞会(ひたちなか市)
- ・高野宿ビオトープ生物調査実施 計6回



2. ひたちなか市親水性中央公園ビオトープメンテナンス計画協力

3. 取手市立戸頭小学校 ビオトープ計画協力

4. Facebook等SNSを使った地区情報発信の継続での情報発信

※Facebook:「日本ビオトープ協会 関東支部」

5. 他団体との情報連携強化

6. 会員拡充



放流会



計画図

北陸・信越地区活動計画・報告 委員長 久郷 慎治 (株式会社 久郷一樹園)

1. ビオトープアドバイザー認定試験研修会・富山(新規)、更新・スキルアップ研修会
月日:2019年10月17日(木)・18日(金)・19日(土)
場所:富山県民会館
※詳細は、**本号P.15** 又は協会WEBページ(<http://www.biotope.gr.jp>)
アドバイザー・研修会ページ(<http://www.biotope.gr.jp/adviser/exam/>) をご覧ください。
※BA更新研修会 詳細は <http://www.biotope.gr.jp/adviser/seminar/> をご覧ください。
2. 富山県ビオトープ協同組合との研修会の開催
3. 富山県ビオトープ研究会との勉強会の開催
4. 射水ビオトープ協会との研修会の開催
5. NPO法人きんたろう倶楽部へのビオトープ設計・施工協力
6. 会員増強
・法人会員の勧誘強化、近隣県(石川県・新潟県・長野県)の会員の獲得



静岡地区活動計画・報告 委員長 藤浪 義之 (株式会社 藤浪造園)

1. 講演・講習・視察会の開催 未定
2. 麻機遊水地保全活用推進協議会の参加
・クリーン作戦の参加 5月18日 実施
みずあおい自生地攪乱作業 5月16日 実施
・夜の昆虫観察会 8月24日 予定
・サクラタデ観察会 10月12日 予定
3. 「ホタル水路づくり研修会」(神奈川県伊勢原市)への協力
・4月、5月、7月参加
4. 中町浄水場里山再生 指導及び協力
5. ビオトープPR活動
6. 静岡地区会の開催 未定
7. 会員の拡大



クリーン作戦観察会の様子



攪乱作業



攪乱後2か月

中部地区活動計画・報告 委員長 青山 正尚 (太啓建設 株式会社)

1. 中部ブロック会議開催 6・8・9月
2. ビオトープフォーラムin愛知2019
月日:令和元年6月28日(金)
場所:ミッドランドホール(名古屋市)
※詳細は**本号P.16事務局ページ**をご覧ください。
○フォーラム同時開催 中部地区委員会 パネル展
3. 中部地区委員会 ビオトープ施工事例パネル展
月日:令和元年7月13日(土)~9月1日(日)
場所:下山パークパーク(愛知県豊田市)
4. BAスキルアップ 研修会
ビオトープ・近自然工法 施工事例発表
日時:令和元年7月24日(水) 18:00~19:00
場所:名鉄トヨタホテル
5. BAスキルアップ 研修会
日時:未定 場所:未定
6. 会員募集 法人・個人会員
・法人会員4月入会 1社 水嶋建設(株)



ビオトープフォーラムin愛知2019



パネル展(下山パークパーク)の様子

近畿地区活動計画・報告 委員長 西川 勝（近江花勝造園 株式会社）

1. 滋賀ビオトープ研究会等の研修会を開催
2019.7～2020.3
2. 西の湖地域のヨシ帯の調査
2019.11～2020.3
3. 甲賀地域の石材(盤石)跡地のビオトープ地の調査
2020.1～2020.5
※地域の造園・土木業と協力して調査
4. 蒲生野内の小さなビオトープづくり後の調査
2019.8～2019.9 ※継続事業
5. 個人会員の拡大



中・四国地区活動計画・報告 委員長 梶岡 幹生（株式会社カジオカL. A）

1. 江田島古鷹山ビオトープ、西日本豪雨災害の復旧計画の策定
2. 国営備北丘陵公園「夏休み自由研究」開催のアシスト
3. 九州地区のBA更新のアシスト
4. ビオトープ出前講座の実現、地区内＋地区外開催のアシスト
5. 地区会員の情報交換
6. 会員拡大
7. ビオトープ事例集の販促



豪雨災害前の古鷹山ビオトープ



豪雨災害の状況

九州地区活動計画・報告 委員長 田中 和紀（内山緑地建設株式会社 九州支店）

1. BA会員研修・視察会
公園内で手掛けているビオトープの活動状況・維持管理手法を聞き
スキルアップに繋げる。
2. 学校ビオトープの事例報告会
BAが報告を兼ね主導で市民、学生なども参加してもらい
「見る.知る.学ぶ」啓蒙を図る。
3. ビオトープ活動:BA更新研修会、PR活動
4. 会員拡大



2019年度 ビオトープアドバイザー認定試験研修会 ご案内

ビオトープ技術者養成事業「ビオトープアドバイザー(BA)認定試験研修会」は、各地区にビオトープ技術者を増やし、地域社会の環境に貢献する事業であり、今年度は10月に富山県富山市にて行います。BA更新、スキルアップ研修会としまして、すでに取得されたBAのご参加も可能です。多くの方々にご受講いただきたく、ご案内かたがたご周知のお願いまで申し上げます。

「第39回 ビオトープアドバイザー認定試験研修会・富山」ご案内

月日:2019年10月17日(木)~19日(土) ※19日は現地視察会(自由参加)

会場:富山県民会館 (富山駅南口から徒歩10分)

講師:鈴木邦雄先生(横浜国立大学名誉教授・前学長、協会代表顧問)、

高橋剛一郎先生(富山県立大学工学部環境工学科 教授)、

櫻井 淳(協会会長)、鈴木元弘(協会副会長)、梶岡幹生(協会総務委員長)、他

申込締切:2019年10月9日

※詳細は協会WEBページ(<http://www.biotope.gr.jp>)

アドバイザー・研修会ページ(<http://www.biotope.gr.jp/adviser/exam/>)をご覧ください。



第12回ビオトープ顕彰(2019年度募集) お知らせ

国内各地で続けられているビオトープづくりを一層広めるために、毎年度、模範とすべき各種のビオトープを全国から募集して顕彰しています。顕彰された優秀なビオトープを全国に発信し、多様な生きものの生息環境が人々の生活にとっても重要であることを伝えていきたいと思っております。

皆様のご応募お待ちしております。

募集期間:~2020(令和2)年3月10日

※応募方法など詳細は協会WEBページ(<http://www.biotope.gr.jp>)

又はビオトープ顕彰ページ(<http://www.biotope.gr.jp/kenshou/>)をご覧ください。

『事例で学ぶ ビオトープづくりの心と技 一人と自然がともに生きる場所』 本のご案内

日本各地域の気候や風土の特性を踏まえながら、「失われた自然の回復」と「人と自然の共生」をつくり出すビオトープづくりの62事例を紹介。その心(考え方・方針)や施工技術・工法、整備効果や利活用の方法について、図面や写真を使いながらわかりやすく解説。ぜひ皆様おもとめください!

【編者】NPO法人 日本ビオトープ協会

【監修】鈴木邦雄(横浜国立大学 名誉教授・元学長、日本ビオトープ協会代表顧問)

【発行】一般社団法人 農山漁村文化協会(農文協)

2019年6月30日発行

A4判 141頁オールカラー

定価 本体3,000円+税 【日本ビオトープ協会会員価格 2,500円(税込)】



- ◇チラシ申込書にご記入いただき、事務局へメール添付かFAX送付、又はメールに「冊数、会社名・お名前、発送先住所、電話番号、会員の場合は法人・個人・賛助」を明記し下記事務局へお申送ください。
- ◇定価:本体3,000円+税、送料無料にて発送いたします。
- ※日本ビオトープ協会会員は会員価格2,500円(税込)、送料は実費をご負担いただきます。(発送方法は冊数に応じ、宅急便の場合は送料着払いとさせていただきます)
- ◇本の代金については、本発送時に請求書を同梱しますので、指定の振込先にご入金をお願いします。
- ◇お申込・お問い合わせ先:日本ビオトープ協会本部事務局

〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-6-7-101
FAX03-6304-1651 E-Mail: honbu@biotope.gr.jp

好評発売中!

総会・フォーラムの実施

◇第17回通常総会

日時:2019(令和元)年 6月28日(金)11:00~12:00

会場:ミッドランドホール・会議室C(ミッドランドスクエア5F)(愛知県名古屋市)

◇ビオトープフォーラムin愛知2019-COP10からポスト愛知へ

日時:2019(令和元)年 6月28日(金)13:00~16:20

会場:ミッドランドホール

主催:特定非営利活動法人日本ビオトープ協会

共催:自然環境復元学会

後援:環境省、文部科学省、農林水産省、国土交通省、愛知県、名古屋市、豊田市、
一般社団法人日本造園建設業協会中部総支部、一般社団法人愛知県造園建設業協会、
矢作川沿岸水質保全対策協議会、環境パートナーシップ・CLUB(順不同)



【フォーラム内容】

開会の辞 日本ビオトープ協会 中部地区委員長 青山正尚

会長挨拶 日本ビオトープ協会 会長 櫻井 淳

祝辞 環境省中部地方環境事務所長・秀田智彦氏

愛知県環境局長・森田利洋氏

第1部 第11回ビオトープ顕彰表彰式

- ・ビオトープ大賞「びおとーぷ堤」
- ・審査委員長賞「アッケシソウ自生地『アッケシランド』」
- ・環境教育賞「村松ネイチャーわくわくプロジェクト」
- ・地域貢献賞「えさし藤原の郷 水路のビオトープ」

顕彰委員長・鈴木邦雄先生による講評

事例発表:「びおとーぷ堤」「村松ネイチャーわくわくプロジェクト」

第2部 基調講演「COP10からポスト愛知目標へ」

愛知県知事 大村秀章氏

事例報告「トヨタ環境チャレンジ2050」

トヨタ自動車株式会社 環境部企画室長 石田栄治氏

事例報告「命をつなぐPROJECT」

NPO法人日本エコロジスト支援協会理事・事務局長 北村秀行氏

命をつなぐPROJECT 学生実行委員 小池まい氏、事務局 村田まりな氏

閉会の辞 日本ビオトープ協会 副会長 鈴木元弘

参加者:298名



フォーラムの様子

「ビオトープフォーラムin愛知2019」は、地元をはじめ全国から参加をいただき、盛大に開催することができました。関係官庁他の後援と講師の先生、協会員の方々をはじめ、皆様にご協力をいただき、心より厚くお礼申し上げます。今後ともご指導・ご鞭撻のほどをお願い申し上げます。

※報告書は協会WEB活動実績ページ等にUP(下記)

・フォーラム報告書 <https://www.biotope.gr.jp/wp-content/uploads/20190628bio-aichi.pdf>

・顕彰講評・受賞紹介 本号P.17-19掲載 又は<https://www.biotope.gr.jp/wp-content/uploads/biokenNo11.pdf>

◇2日目エクスカーショ(現地見学会)

日時:6月29日(土)9:00~14:30(名古屋駅前集合・解散)

見学先:株式会社三五「ECO35」ビオトープ・ミュージアム、
名古屋城(昼食後自由見学)

参加者:28名



参加者の方々から、企業ビオトープとしてのすばらしい取り組みが大変参考に、勉強になった、というお声をいただきました。

エクスカーショの様子



その5 ふたたび 環境リテラシー：答えは自然にあり

ビオトープと聞いて、「あの人工的な自然をつくることですね」と話した人がいます。そんなまごごとをやっているのではないのに、私たちの活動もまだまだですね。環境リテラシーとは、環境問題を理解してそれを伝える能力であり、またそれに対処する技能を有し実行できることです。つまり、現代人の常識として、環境問題に関する資質と能力を身につける必要があります。ここに示すまでもなく、環境教育により国民はあらゆる機会を通じ、環境問題について学習し、自主的・積極的に環境保全活動に取り組むべきであると言われていいます。その意味からもビオトープの展開と目的は、あらゆる人々に資するものであり、増々私たちの活動の重要性が増しています。

本編のビオトープを理解するヒントの最後として、自然と触れ合うことから学習ステップを上げ、人が自然の一部であることの体験的自覚に至る道程の粗筋を示しました。ただし、人々の社会システムと自然に関しては、内容的に希薄であることは否めません。ぜひ機会をあらためて他の専門家の助言を得るべきです。日本人の国民性は、自然に対する畏敬の念と高い倫理性があると理解しています。その意味から、自然保護を容易に受け入れる素地があり、前向きの議論が展開できると確信しています。



図1. 自然の中の子供：草原の中の子供は喜々として、恐れる様子もなく、元気よく胸を張って歩き回る。バッタがとび出ると走って追い回す。



図2. センス・オブ・ワンダー：自然の中で子供たちは、探検と発見に夢中になる。レイチェル・カーソンが残したこの言葉をいつまでも大切にしたい。



図3. 地域で学ぶ：住んでいる地域の自然を知ることが大切である。生活の中の自然を調べ、共生している生きものを知ることが全ての基本である。



図4. 希少種の放虫：奈良県五條市でヒメタイコウチの生息地が、道路建設により消失した。地元の小学生が飼育して代替地に放し、新たな生息地ができた。



図5. フィールド・ワーク：生きもの調査には対象によって、いろいろな方法がある。よい機会を得て体験することは、自身のレベルを上げることになる。

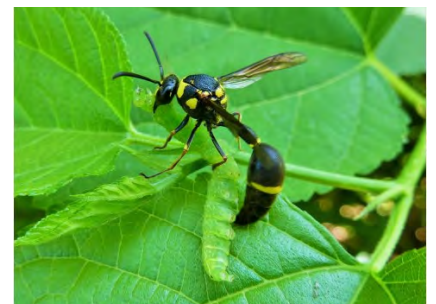


図6. 生態系：生物が生息している場所とその暮らしは種ごとに独特である。また生息している生きもの達は、お互いにつながりを持って生きている。



図7. モニタリング：ある場所の生きものの変化を調べることで、環境条件の変化を知ることができる。そのためには地道な観察が必要である。



図8. 薪炭林の更新：農業は自然に働きかけて人類の生活を支えてきた。燃料を生産するために薪炭林を持続的に利用した一例を見ても学ぶことは多い。



図9. 食の生物多様性：この寿司桶には14種の生物が収められている。生態系サービスにより私たちは豊かな生活を送ることができる。

編集後記

先日の「ビオトープフォーラムin愛知2019」におきましては、多数の方々にご参加いただき、顕彰表彰式、事例発表、基調講演、講演(事例報告)、翌日の視察まで、好評のうちに幕をとじることができました。

時を同じくして、待望の「ビオトープづくりの心と技」(編者:日本ビオトープ協会、発行:農文協)が発刊されました。協会員はもとより、全国のビオトープ人のご期待に応える事例集に仕上がったと自負しております。ぜひ日々の活動にご活用いただければ幸いです。

さて、本号では「水辺のビオトープ:河川」をテーマに掲げさせていただきました。

私たちが生きるために必要な水は、全生態系にとっても必要不可欠なものです。巻頭言で野澤副会長が掲げた通り、私たちも原点に戻るつもりで、編集に努めてまいりました。

山田先生には、撮影の現場から「伝統工法・柳枝工」をテーマに、楽しく、興味深い寄稿をいただきました。また、BA投稿では内海様にユルリ島の鳥類について、佐藤様からはバングラデッシュの人材育成の取り組みなど、貴重な情報をお寄せいただき、本号も充実した、素晴らしい内容に仕上がりました。ぜひ隅々までお目通し下さい。

発刊された事例集の中にも水・河川にまつわる事例が数多く掲載されています。ビオトープに多様な価値観が求められる現在、改めて水辺の価値に向き合ってみてはいかがでしょうか。

最後になりましたが本誌発行にあたり、ご執筆いただきました先生方、執筆者の皆様に心より感謝申し上げます。

編集委員:情報委員 若月学・砂押一成、正副会長、総務委員、事務局

自然との共生をめざして一緒に活動しませんか。・・・会員募集中・・・

- | | |
|-------|--|
| 会員の種類 | ・法人正会員 この法人の目的に賛同して入会し、活動を推進する法人 |
| | ・個人正会員 この法人の目的に賛同して入会し、活動を推進する個人 |
| 年会費 | ・法人正会員 100,000円 |
| | ・個人正会員 10,000円 |
| | ※10月以降3月末までのご入会は規程により、年会費は半期分となります。 |
| 会員の特典 | ・年2回発行の機関紙「ビオトープ」の入手。 |
| | ・会員メーリングリストによりE-Mailによるシンポジウム、研修会等情報の入手。 |
| | ・その他、地区活動への参加など。 |

入会手続き、入会申し込み用紙については、WEBページ<http://www.biotope.gr.jp/application/apply/>または下記本部事務局までお問い合わせ下さい。

日本ビオトープ協会誌「ビオトープ」No. 44

2019年(令和元年)8月31日発行

発行所	特定非営利活動法人 日本ビオトープ協会
発行責任者	櫻井 淳 (日本ビオトープ協会 会長)
編集	協会 情報委員会・正副会長・総務委員会・本部事務局
本部事務局	〒170-0005
	東京都豊島区南大塚2-6-7-101
	TEL 03-6304-1650 FAX 03-6304-1651
	E-Mail honbu@biotope.gr.jp
	URL http://www.biotope.gr.jp

会員、ビオトープアドバイザーからの投稿歓迎

ビオトープの研究、実践事例等、会員・ビオトープアドバイザーの投稿を募集しています。投稿頂く場合は本部事務局までご一報下さい。



ミズバショウ
(北海道雨竜郡幌加内ビオトープ)
写真 内海 千樫 氏 提供